2021 年度

聖路加国際大学
国際・地域連携センター
PCC 開発・地域連携室

＜活動報告書＞

People
Centered
Care

■聖路加健康ナビスポット：るかなび

事　業　主：髙橋恵子[*1]
事業共同メンバー：大田えりか[*1] 中村めぐみ[*1] 山田雅子[*1] 亀井智子[*1] 蛭田明子[*1] 西村恵理奈[*1]
西本葵[*1] 佐藤晋巨[*1]
事 業 対 象：　一般市民
利用人数（年間のべ人数）：3592 名
開催（実施）回数（年間回数）：計　238 回
開　催　日：夏季休暇・年末年始を除く　月～金　9 時半～17 時

【事業目的】

市民一人一人が主体的に自分の健康生活を創り守るために、市民と看護職がパートナーを組み、地域に開かれた健康情報サービス活動を展開する。

【事業内容】

るかなび開設 17 年目、PCC 開発・地域連携室となって 3 年目となり、地域連携活動の強化を図っている。新型コロナウイルス感染の情勢を考慮しながら、感染防止対策を順守しつつ、市民の健康維持につながる活動を可能な限り継続した。るかなびの運営は、るかなび運営会議メンバー10 名（看護教員 7 名、看護師 1 名、司書 1 名、事務員 1 名）と、非常勤看護師 2 名で行い、聖路加国際病院所属のボランティアによる活動は休止のままとなった。

今年度のサービス活動への総利用者数は 3,592 名で、中央区コロナワクチン集団接種が同建物で 5 月から開始となり、往来が増えたことで前年度より大幅に多くなった。

＜健康チェック＞

例年同様、骨密度・体組成・握力を有料で測定し、看護師が結果のフィードバックを行った。ワクチン接種のついでに健康チェックを行う高齢者が急増し、6 月は例年の 2 倍以上で、口コミやリピーターにつながっている。外出制限が長期化する中で、運動不足、体重増加を自覚している人が多かった。

＜健康相談＞

よろず健康相談は、総数 70 件（うち電話対応 4 件）で、コロナ禍で精神的不調に悩んでいる人もいた。専門看護相談は、11 領域を提示し、2 月から「中皮腫・アスベスト」が加わった。チラシに記載していない領域の問い合わせもあり、適宜看護教員と相談の上で対応し、来談者総数 41 名であった。2 回目の来訪が難しくなったため資料送付というかたちを取った人もいた。

また、コロナ感染者再増加に伴い、るかなび看護師が聖路加国際病院相談支援センターのがんに関する電話相談対応の代行を再開し、34 件に応じた。

＜イベント＞

感染状況を鑑みつつ行った。新たな試みとして、7 月から子どもを対象に「からだのおはなし会」を 8 回開催し、参加した子どもは延べ 36 名で満足度平均（0～10 数式尺度）は 9.2 だった。11 月～2 月は感染拡大防止のために中止となった区民カレッジの内容の短縮版をるかなびミニ講座として開催した。なお 2 月は感染者急増に伴い延期とし、訪れた人に個別対応した。

地域連携活動としては、中央区社会福祉協議会主催の「ちょこっと相談会」を月 1 回るかなび内で続けた。また、中央区高齢者通いの場に出向いてミニ健康講座を行ったり、区内に新設された多世代交流スペースでからだのおはなし会を行ったりした。中央区健康福祉まつりは感染防止対策のもと規模を縮小して実施され、るかなび紹介展示と握力測定、からだのおはなし会を行い、およそ 100 名が訪れた。

健康・介護福祉用具の企業展示は今年度も見合わせた。

＜図書閲覧サービス＞

年間 238 日間オープンし、図書利用は年間延べ 1,525 冊（うち闘病記 160 冊）・雑誌 148 冊であった。

[*1] 聖路加国際大学

コロナワクチン接種の関連でるかなびに訪れる人が増えたため、年代層に合わせて図書の配置を工夫した。子どもは内臓 T シャツや模型・パズルへの関心が高いので、人体骨格模型を買い替え内臓 T シャツが目立つように整えた。

＜教育活動＞

今年度も PCCN 論はオンライン中心となり、例年通りのるかなびでの演習はしなかったが殆どの学生が何らかの測定に訪れた。感染が落ち着いていた間には、サービスラーニングを選択した学生 25 名、老年看護学実習　8 名（学士 7 名、学部 1 名）を受け入れた。看護ゼミナール／総合実習を選択した学士編入 4 年生 2 名は、オンラインで健康チェック後の説明・相談をロールプレイのかたちで体験した。また、遺伝看護学上級実践コースの院生 1 名と新たにニューロサイエンス看護学の院生 2 名の演習を受け入れた。

＜研究活動＞

2021 年度は、地域に開いた子どもへのからだのおはなし会とがんに関する専門看護相談の実績をまとめ、大学紀要に掲載した。からだのおはなし会は聖ルカ・アカデミアにて音声付スライド録画報告した。

【満足度調査 0-10 数式尺度】

満足度：平均 9.5

【今年度の業績】

＜論文＞

a．　中村めぐみ・髙橋恵子他：大学が地域に開く子どもへの「からだのおはなし会」実践報告、聖路加国際大学紀要 Vol.8、2022

b．　中村めぐみ他：地域に開いたがん相談・支援の実情―大学健康情報サービスの場でのがん相談に焦点をあてて、聖路加国際大学紀要 Vol.8、2022

＜発表＞

a．　中村めぐみ・髙橋恵子他：聖路加が地域に開く子どもへの「からだのおはなし会」―子どもたちが大切な自分のからだを知るために，第 16 回聖ルカ・アカデミア、2022 年 2 月

＜記事掲載＞

a．　中央区サロンマップ：「るかなび」紹介、中央区社協だより、2022 年 1 月

b．　聖路加 NEWS：「るかなび」が看護学生中央区健康福祉まつりに出展参加、2022 年 2 月

【写真】

＜子どもへの「からだのおはなし会」＞

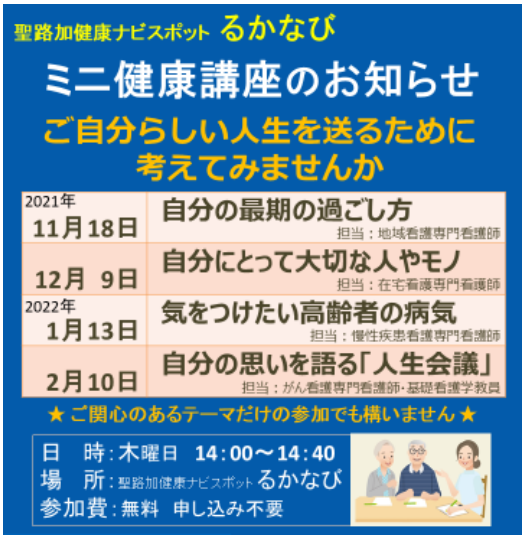
＜るかなび内＞

＜多世代交流スペースにて＞

＜健康福祉まつり＞

＜高齢者通いの場への出張「るかなび健康講座」＞

<ランチタイム：ミニ健康講座>



<老年看護実習の一環で通いの場見学>

■ 多世代交流型デイプログラム聖路加和みの会

事　業　主：亀井智子[*1]
事業共同メンバー：川上千春[*1]、河田萌生[*1]、江藤祥恵[*1]、猪飼やす子[*1]、入江由香子[*2]
事 業 対 象：区内小中学生、および 65 歳以上高齢者
利用人数（年間のべ人数）：96 名
開催（実施）回数（年間回数）：計 12 回
開催日：2021 年 7 月 2 日、9 日、10 月 8 日、15 日、22 日、29 日、11 月 12 日、19 日、26 日、12 月 10 日、17 日、24 日

【事業目的】

都市部地域における小中学生と高齢者の互恵的ニーズにもとづく世代間交流の機会の提供、および地域共生社会としてのソーシャルキャピタルの醸成、ならびに世代間交流看護支援の開発。

【事業内容】

「聖路加和みの会」は、発会依頼 14 年が経過した。本プログラムは都市部における高齢者と小中学生の世代間交流プログラムであり、交流を通して互恵的ニーズを充足するとともに、高齢者と子ども世代のヘルスプロモーション、高齢者から子供世代への世代継承、子どもにとっての高齢者理解、これらによるソーシャルキャピタルの醸成を目指している。

2021 年度は、4 月に到来した SARS-Cov2 感染流行の第 4 波、7 月の第 5 波、2022 年 1 月の第 6 波を避け、感染予防対策を行いながら、7 月、10 月、11 月、12 月に和みの会を開催した。特に第 5 波は緊急事態宣言も発出され、不要不急の外出の自粛を要請される状況となったため、ニュースレターにて、前期の活動を振り返り、参加者同士や教員とのつながりを維持するよう努めた。開催の際には、3 密を回避するための感染対策のほか、プログラムについても個別の作品を作り、共有する内容とし、参加者同士の密を避けながら世代間での会話が交わされるよう努めた。合計 12 回実施し、本学教員・スタッフ 5 名、プログラムボランティア 3 名、地域ボランティア 5 名で運営した。

参加者は子ども 2 名（小学 3 年生）、高齢者 4 名で、内 2 名がいわゆるフレイル高齢者である。利用者の平均年齢は、高齢者 83.75 歳 (SD 3.83)、子ども 9 歳であった。高齢者の参加期間は平均 10.25 年 (SD 3.76) で、高齢者の 7 月（今年度最初の会）時点の GDS-15 は中央値 4 点、10 月は 1 点であった。10 月以降のアンケートについては、SARS-Cov2 の感染拡大により和みの会が中止となったため、実施できていない。

プログラムは 14 時～16 時 30 分に時間を短縮し、前半は高齢者の健康チェック、高齢者向けプログラム（フリートーク、書道、あみものなど）、後半は子どもから希望があった遊びを参加者全員で行った。子供が下校し会に合流した後は、高齢者が前半部分で作成した経過を子供に見せたり、作り方を教えたりし、子供も作品作りに加わることができた。互いに完成作品を披露し感想を話したり、会の途中から参加した子供が高齢者と同じ時間に作品を作り終えると、高齢者から感嘆の声が上がっていた。会の時間が短縮され、また感染対策のために個別の作業となっても、自然と高齢者と子供の会話が弾む時間があり、世代間の交流や知恵の伝承の機会を提供することができたと考える。また、高齢者にとっては定期的な外出先であり、社会とつながる場になっている。本会の活動により、都市部地域における高齢者と子どもの世代間交流の拠点として、高齢者の心身の健康、小学生の高齢者観の醸成に意義があると考えられた。一方、参加期間が長い高齢者では、健康状態の低下が顕在化しているが、来所を楽しみにしているといった声があり、多様な参加者のニーズに合わせた運営方法が今後の課題となると考える。

教育活動では、今年度は学部 4 年生の高齢者ヘルスプロモーションにおいて、世代間交流支援看護の実践を予定していたが、第 4 波の到来により、和みの会の開催が中止となったため、実施できなかった。一方で、12 月 24 日のクリスマス会では、学生の手話クラブ有志へ協力を依頼し、クリスマスと新年を祝う指文字を教えてもらいながら、クリスマス会のプログラムを進行した。学生には臨地実習同様に 2 週間の健康観察、感染対策の実施を依頼した。学生からは、SARS-Cov2 の感染拡大以降、オンラインのみでのクラブ運営であったため、このような機会があり、楽しかった、また呼んでほしいと感想があった。参加者同

士で、指文字を教えあうことで、自然と世代間の交流が生まれていた。高齢者・子供からは、また来てね、今度はいつ来るのとの声があり、満足度も高い会となった。SARS-Cov 2 の感染拡大により活動の自粛を求められる学生においては、課外活動の場となったと考える。

研究活動では、開発から 9 年が経った聖路加式世代間交流観察（SIERO）インベントリーの精選、認知症高齢者への適用可能性を検討している。

【満足度調査 0-10 数式尺度】

満足度：高齢者平均 8.5 点（SD 1.17）、小中学生平均 9.46 点（SD 0.88）

【今年度の業績】

<その他-論文->

【写真】

世代間交流書道（七夕の願い）

クリスマス会（看護学部生　手話クラブ有志参加）

---

*1 聖路加国際大学大学院老年看護　*2 大東文化大学　スポーツ・健康科学部スポーツ科学科

■赤ちゃんがやってくる

事　業　主：片岡弥恵子[*1]
事業共同メンバー：土屋麻由美[*2]、堀内成子[*1]
事 業 対 象：これから兄姉になる子どもとその家族
利用人数（年間のべ人数）： 0 名
開催（実施）回数（年間回数）：計 0 回
開　催　日： -

【事業目的】

新しく赤ちゃんを迎える家族、特に兄弟が、妊娠・出産・新生児について学び、赤ちゃんを迎えるこころの準備ができる。子どもたちが、生命の誕生について学び、自分の生・性を大切にすることができるようになる。

【事業内容】

＜活動内容＞

地域の開業助産師との協働で「赤ちゃんがやってくる」のクラスを実施している。「赤ちゃんがやってくる」は、新しく子どもが生まれる家族、特に兄姉になる子どもたちに対して、「あかちゃんが生まれるってどういうこと？」「なぜ、あかちゃんが生まれるの？」「あかちゃんとは？」などについて学習し、新しく家族を迎えるための準備クラスである。また、親が上の子どもたちにどのように接したらよいかを話し、赤ちゃん返りへ等への不安を軽減することもできる。さらに兄姉になる子どもたちが、新しい生命の誕生を通じて、自分の生・性を大切にすることができるよう働きかけると同時に、母親や父親が、今後子どもたちと性に関する話ができるきっかけとなっている。

＜活動成果＞

2021 年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、年間 8 回開催予定のすべてのクラスが中止となった。

＜今後の課題＞

2022 年度は、「赤ちゃんがやってくる」クラスを対面またはオンラインを視野に入れ、開催について検討する。

[*1] 聖路加国際大学　[*2] 麻の実助産所・所長

■子どもと家族中心のケア 子どもの健康、知ろう、考えよう

～子どもの健康を家族と考える学習・交流会～

事　業　主：小林京子[*1]
事業共同メンバー：西垣佳織[*1] 福冨理佳[*1] 賀数勝太[*1] 山本光映[*2] 東飛鳥[*2]
事 業 対 象：原則、中央区在住している子どもやそのご家族と、中央区にて勤務している子どもに関連した保健、福祉、教育等に従事している人々（保育士、家族など）
利用人数（年間のべ人数）：31 名
開催（実施）回数（年間回数）：計 2 回
開　催　日：7 月 30 日、10 月 29 日

【事業目的】

中央区在住の子どもやそのご家族、子どもに関連した保健、福祉、教育に従事している人々との交流や学習会を通して、子どもの健康をサポートするためのネットワークを広げる

【事業内容】

＜活動内容＞

2021 年度も新型コロナウイルス感染拡大の影響により、開催回数を縮小したが 2 回の開催ができた。7 月は「元気に育つための子どもの口の常識・非常識」とした歯の健康について歯科医師、歯科衛生士を講師に招き web 配信で実施した。また、10 月 29 日は「子どもの事故　応急処置と救急蘇生」として、web にて救急蘇生アプリを活用して自宅で参加者が演習できる内容の講座を実施した。この講座は、中央区立泰明小学校教諭が参加し、泰明小学校での救急蘇生の勉強会への協力を行うこととなり、話し合いを進めている。これら、例年よりは開催回数が少なかったものの、2020 年度末に検討した目標を達成した。

【VAS：満足度調査 10 点満点】

8.45

【今年度の業績】

該当なし

[*1] 聖路加国際大学　[*2] 聖路加国際病院

■天使の保護者ルカの会-お空の天使パパ&ママの会-

事　業　主：蛭田明子[*1]
事業共同メンバー：堀内成子[*1]　石井慶子[*2]　星野浩二　太田尚子[*3]　千葉真希
事 業 対 象：流産・死産・新生児死亡で子どもを亡くした両親とその家族
利用人数（年間のべ人数）：29 名
開催（実施）回数（年間回数）：計６回
開　催　日：４月 10 日、７月 10 日、11 月６日、11 月 27 日、12 月 11 日、３月 12 日

【事業目的】

周産期に子どもを亡くした両親を対象に、思いを語り合い、分かち合う場を提供し、グリーフへの支援を行う。また、ペリネイタル・ロスに関心のある医療者や学生が、両親の体験や思いに触れ、両親に対する支援や態度などを考える機会を提供する。

【事業内容】

今年度もCOVID-19の影響を受け、緊急事態宣言発令期間中の5－6月、9－10月、及び第6波のピークである1月は、お話し会を中止した。開催できたのはお話会が5回、手作りの会が1回の計6回であった。中止の会にも参加の希望はあり、開催のニーズはあった。しかし、常に感染の隙間を縫うように開催する状況であり、11月に臨時で1回開催をしたものの、お断りをした方も少なくはなかった。オンラインでのお話会開催という方法もあるが、対面で交流するからこそのグループのダイナミクスがあり、ルカの会としてオンラインで開催をすることは今年度も検討しなかった。

開催時の感染拡大予防の対策は、昨年度と同様に行った。具体的には、最大人数を6名、開催時間を2時間と少なくすること、お話会前後の机といすの拭き掃除、テーブルとイスの配置の工夫、受付時の体温や体調の確認、手指消毒の徹底、涙をぬぐったティッシュを捨てるための個人用のビニール袋の配布、会場内での飲食はペットボトルと一口の飴・チョコ類とすること。また、大学の方針に則って体調・体温に関して参加の基準を設定し、ホームページ上でご案内するとともに、参加申し込み時のメールでも改めてお伝えし、管理を徹底した。1点、昨年度からの変更点として、回収率が悪いためアンケートをWebから紙媒体に戻したが、COVID-19に関連する問題は今年度も発生しなかった。

その他、運営上の問題として、昨年度、時間が2時間と短いために話したいことを十分に話せなかったという意見があった。そのため今年度はグループを2つに分けることも検討した。しかし、会場の広さの問題で最初から２グループにするとグループ内での距離が近くなることもあり、男性の参加者がいる場合や気になる参加者がいる場合に、メイングループからサブに途中で一人二人移動するにとどまった。それでもアンケートでは、十分に話しができたとする回答がほとんどであり、全体の満足度も昨年度より上昇していた。時間と人数のバランスについては、感染の状況も鑑みて次年度また工夫をしていきたい。

また、今年度から、以前にルカの会に参加し、他の自助グループでスタッフ研修を積まれた方が、体験者スタッフとして新たに毎回参加してくださるようになった。今年度は比較的喪失からの時間が早い方の参加が多かったり、時間が経っている方は非常に葛藤を抱えている様子であったりなど、進行の難しいお話会もあったが、体験者スタッフの発する言葉が苦しみの中にある方々の気持ちにやさしく寄り添い、心の扉を開くように、ぽつりぽつりと発話が進んでいく場面が多々みられた。また、パパさんスタッフがいるので参加する、という方もいらっしゃる。体験者スタッフがいてこそ、参加されている方が自分の葛藤を言葉にすることができるのであり、PCCの意義を改めて実感した。

今年度お話会は少なかったが、2021年5月31日付けの厚労省の通達により、流産・死産・新生児死亡の方の支援に取り組み始めた保健センターが増えた。この背景により、保健センターからの講義の依頼や、ルカの会で作成・配布している小冊子、リーフレット類を行政で活用するための問い合わせがこれまでより多かったのが今年度の特徴である。引き続き、当事者の方への直接のサポートと共に、地域でのサポートの拡がりに貢献する活動を続けたい。

【満足度調査0-10数式尺度】

平均9.23点

【今年度の業績】

＜その他-学外発表->

a. 32nd International Confederation of Midwives. Virtual Triennial Congress. The meaningfulness of a support group where parents who have terminated pregnancies can share their experiences: Activity report of a Japanese support group.（Poster session) (June 2-30,2022)
b. 第 62 回日本母性衛生学会総会・学術集会　シンポジウム 1「流死産女性に対する心理社会的支援」座長・シンポジスト(2021 年 10 月 15 日)
c. 八王子市大横保健福祉センター「流産死産の悲嘆と心理社会的支援」研修（2021 年 12 月 3 日）
d. 横浜市こども青少年局こども家庭課「流産死産を体験された方への支援」研修（2021 年 12 月 20 日収録）
e. 厚生労働省委託事業「不妊症・不育症ピアサポーター等の養成研修」グループワーク講師（1 月 22 日、23 日）
f. 東京都助産師会「周産期喪失後の次子妊娠・出産の支援」講習会（2022 年 3 月 1 日）
g. 第 36 回日本助産学会学術集会「人工死産を選択した両親の認識に基づく支援の課題とニーズ」ポスター発表（2022 年 3 月 19 日、20 日）

＜記事掲載＞

a. 令和 2 年度子ども・子育て支援推進調査研究事業「流産や死産等を経験した女性に対する心理社会的支援に関する調査研究」事業報告書　株式会社キャンサースキャン
b. 市民と看護職をつなぐコミュニティサイト https://kango-net.luke.ac.jp/nursing/kenkyu/
「流産・死産・新生児死を経験した母親と家族のためのグリーフケア」

【写真】

*1 聖路加国際大学　*2ART 岡本ウーマンズクリニック、体験者、公認心理師、生殖心理カウンセラー，社会福祉士　*3 静岡県立大学

■天使の保護者ルカの会グリーフカウンセリング

事　業　主：堀内成子*1
事業共同メンバー：石井慶子*2　堀内ギルバート祥子 *3
事 業 対 象：①流産・死産・新生児死などで子どもを亡くす体験をした家族（母親、父親，兄弟，祖父母）②グリーフケアに悩む看護職
利用人数（年間のべ人数）：76 名
開催（実施）回数（年間回数）：計　70 回
開　催　日：4/7・14・21，5/12・19，6/2・30，7/7・14・21・28，8/4・18，9/8・15・22，10/13・20・27，11/10・17・24，12/8・15・22，1/5・12・19・26，2/2・16，3/9・16・23

【事業目的】

① 流産・死産・新生児期にあらゆる理由でお子さまを亡くされた母親・父親・夫婦・家族を対象にカウンセリングを通して精神的ケア行なう。グループから個人カウンセリングへの速やかな連携・継続的対応により、相談者（体験者）の心理的負担を軽減する。

② 周産期の死別に立ち会う機会の多い看護職のためのグリーフサポートを行い、周産期喪失のケアに悩む看護職の心理的負担を軽減する。

【事業内容】

2021 年度は、グリーフカウンセリングを開始してから、12 年目を迎えた。運営メンバーは、実施と記録保管にかかわる教員 1 名・客井研究員（公認心理師）1 名と、カウンセリングコンサルタントの臨床心理学博士 1 名である。昨年に引き続き、コロナ対策としてオンラインによるカウンセリングと対面カウンセリングの 2 形態で実施した。

・2021 年度の実施回数は、70 回、利用者総数は、76 名（女性 68 名・男性 8 名）,カップルの来談は 6 件であった。利用者の平均年齢は、男女とも 39 歳であった。当事者の家族の来談（妹）は 1 件。昨年度との比較で、利用者数等の減少は、6 月期に、担当者の健康上の理由で、2 日間休止としたためと考えられる。

・開催形態別では、オンライン 31 回（zoom）、対面 39 回であった。コロナ禍にもかかわらず、初回面接では、対面カウンセリングの希望が増えてきている。

・利用回数別では、初回 44 件、2 回目 11 件、3 回目 6 件、4 回以上が 9 件であった。

・来談に至る経緯では、HP の検索によるものが多かった（44 件）が、医療機関や医療スタッフからの勧めによるものは 18 件で、昨年から倍増した。中には保健所から紹介されたケースもあった。男性のみの来談は、2 件と例年と変わらず少なかったが、いずれも、カップル面接から連続していた。

・不妊治療経験者は、29 件（41%）であった。

・体験内容：利用者の体験内容では、複合体験を含めると、流産 13、死産 34、新生児・乳児・幼児死 11、人工死産 14 である。このうち複合的な喪失体験者は 24 件であった。

・現在妊娠中の相談が 3 件あったが、いずれも、過去に、死別後の来談後があり、その後の妊娠により不安が強くなったための利用であった。

・開催後の利用者満足度アンケートは、本年度も、アンケートフォームによる WEB アンケートを実施し、43 件の回答（回答率 61.4%）を得た。（全体満足度を含む 6 項目：10 段階と自由記述）
その平均値は、話したい事が話せたか：9.1，カウンセラーの対応：9.7、カウンセリング環境：9.2、予約手続き：9.4、料金設定：9.1　であった。各項目について、対面とオンラインで比較したところ、大きな差異はなく、全体満足度では、オンラインの方が若干高い値となった。

・オンラインでは、昨年同様、来談が難しい遠隔地からの利用があった。その一方で、対面カウンセリングを強く希望し、新幹線を利用し継続来談するケースもあった。

・精神医療受診中のケースは 5 ケースあり、いずれも、主治医の了解のもとに実施した。1 件は継続中。

・相談内容では、児を亡くした悲嘆のほかに、

① 複数回の流産経験からくる不安をはじめとしたさまざまな「不安」

② コロナ禍における、感染不安、社会不安や就労上の困難（退職・転職含む）
③ 流産や死産を契機として、過去の親族の死別悲嘆
④ 自死企図に関する話題と精神科受診の相談
⑤ 次の妊娠に関する話題
⑥ 親族（親や姉妹）からの相談
⑦ アンガーマネジメント　離婚

などがあった。

・担当カウンセラー（石井）は、令和 3 年度厚生労働省国庫補助事業　子ども・子育て支援推進調査研究事業「子どもを亡くした家族へのグリーフケアに関する調査研究」に、ルカの会の蛭田さんとともに委員として参加した。グリーフカウンセリングにおける知見から、周産期喪失の悲嘆の実態について紹介した。この事業では、人工妊娠中絶に関する実態調査、医療機関・自治体向けの支援の手引き作成に関与した。（2022 年 4 月以降に成果物として公開予定）

・広報活動では、従来のルカの会と連動したパンフレットの配布やＨＰ運営のほかに、ツイッターによる活動発信（日程等の紹介）を行った。[1]

【満足度調査 0-10 数式尺度】

平均　9.51 点（対面 9.43，オンライン 9.67）

【今年度の業績】

<学会発表>

a．第 62 回母性衛生学会総会・学術集会シンポジウム　（厚生労働省国庫補助事業「子ども・子育て支援推進調査研究事業」「流産や死産等を経験した女性に対する心理社会的支援に関する調査研究」に関する委員会共催）「流死産等女性に対する心理社会的支援」、「流産や死産を体験した女性の困難」（2021 年 10 月 15 日）（母性衛生,vol.62(3) ,p76,2021）

<その他-学内発表->

a.　出生前検査および流産死産のグリーフケアに関する自治体説明会（2021 年 6 月 15 日　オンライン開催）講演「流産や死産をされた方への支援」

b.　令和 3 年度厚生労働省委託母子保健指導者養成研修「不妊・不育相談研修」講義（オンライン講座）「流産死産経験者への心理社会的支援」「グループワーク」（2021 年 11 月 15 日）

c.　埼玉県保健師研修会　「流産死産グリーフケアを考える研修会」（2021 年 11 月 30 日）「流産死産の悲嘆とピアカウンセリング」

d.　八王子市保健師研修　「流産死産グリーフケア研修」（2021 年 12 月 3 日）「流産死産の悲嘆と心理社会的支援」

e.　渋谷区保健師研修会　（2022 年 1 月 31 日）「ペリネイタルロスにおけるグリーフケア　～地域の保健師の役割を考える～」

f.　2021 年度厚生労働省委託事業　日本助産師会主催　不妊症・不育症のピアサポーター等養成研修
オンライン（2021 年 10 月～2022 年 2 月）
（医療者向け）　「不妊・不育症患者に対する支援の実際（講義）」「グループワーク」
（ピアサポーター向け）　「グループワーク」
（事業運営者むけ）グループワーク担当者向け研修

<記事掲載>

a．看護ネット　活かす看護研究　「流産・死産・新生児死を経験した母親と家族のためのグリーフケア」
https://kango-net.luke.ac.jp/nursing/kenkyu/post_17.html

---

*1 聖路加国際大学

*2 聖路加国際大学看護学研究科客員研究員　ART 岡本ウーマンズクリニック　公認心理師　生殖心理カウンセラー　がん・生殖医療専門心理士

*3 米国カリフォルニア州 Kaiser　Permanente　精神科　心理療法士　臨床心理士・臨床心理博士

■からだフシギ支援事業

事　業　主： 大久保暢子[*1]

事業共同メンバー： 菱沼典子[*2] 瀬戸山陽子[*3] 村松純子[*4] 白木和夫[*5] 渕純子[*6] 三宅美千代[*7] 原山千咲[*8] ナムーラミチヨ[*9] 島田恵[*10] 渡辺繭子[*11] 舟久保恵美[*12] 本学学部生部活動「からだフシギ」メンバー

事 業 対 象： 5-6 歳児と保護者、幼稚園・保育園関係者、子育て支援に関心がある市民

利用人数（年間のべ人数）：24 名

開催（実施）回数（年間回数）：計 3 回

開　催　日：6 月 6 日、9 月 5 日、2 月 26 日

【事業目的】

健康情報の基本である体についての知識を国民皆のものにすることによって、市民の主体的な健康生成を促進することを大きな目的とし、21 世紀ＣＯＥ終了後も、聖路加看護大学からだ教育研究会を立ち上げて、2014 年に NPO 法人を設立し、活動を続けている。本年の本事業では、5-6 歳児とその保護者に体の知識を伝え、またお話し会を実施する人材（からだ先生）の育成プログラムを実施し、からだ先生の育成を行う。

【事業内容】

a. **子どもとその家族を対象としたお話会の開催**

例年、保育園等でのおはなし会を行っていたが、COVID-19 の感染予防の観点から、おはなし会は実施しなかった。しかし「るかなび」や三重県の NPO「こどもスペース四日市」で、からだ先生研修会を修了した“からだ先生”達により、通常の活動の中にからだのおはなし会を組み込んで実施したという報告を受けている。

b. **からだ先生研修会の開催**

① 第 10 回：6 月 6 日 オンラインでの開催にて 8 名の参加
② 第 11 回：9 月 5 日 オンラインでの開催にて 8 名の参加
③ 第 12 回: 2 月 6 日 オンラインでの開催にて 8 名の参加

c. **からだフシギダンス編の作成**

からだフシギの踊りは、これまでも存在しており、イベント時に披露したり、最近では You Tube での配信も行っていた。今回、ポップ調のダンス編として、ダンスの専門家に参加頂きながら新たに作成し、You Tube での配信を行った。

①活動内容

本年度は、例年開催していた「紙芝居と絵本を用いたお話会」は、5 歳児と保護者を対象として、親子が触れ合い交流しながらの会であることから COVID-19 の感染防止を考慮し、開催を中止とした。

しかし成人個々を対象とした「お話会を実施する人材育成のプログラムの実施」は、オンライン開催を実行した。結果的にオンラインにしたことで全国から参加者が認められ、募集定員に達する盛況な会となった。

プロジェクトメンバーの感染防止も考慮し、本年度は今度の教材作りや課題であった絵本や新書のリニューアル、からだＴシャツづくりに専念し、オンラインで随時打ち合わせをしながら、各個人で作業を進めていった。プロジェクト会議も対面式を止め、オンライン会議に切り替え、例年同様の回数を開催した。

人材育成のプログラムは計 3 回を実施し、オンライン開催のため人数を少人数に制限し、出来る限りコミュニケーションを取りながら進行できるようにし、計 24 名が参加した。

プロジェクト会議は定期的に計 8 回行い、さらに適宜、小会議もオンラインで開催した。からだフシギの踊りのリニューアルも行った。本学の学生による部活動「からだ・フシギ部」は COVOD-19 禍で活動が中止となっていたが、本学 PCC 事業の「るかなび」で「からだのおはなし会」が開始されたことで、その場に出向き、連携と学習を進めていた。

②活動成果

本学 PCC 事業部で「からだのおはなし会」を開催したことで、対面式の紙芝居の実演が開催できた。この実演には、学部生のサークルも参加し、市民への教育とともに学生への教育にも貢献できた。

また教材作成に取り組んだことで、①からだフシギの踊りリニューアルできた。この成果物は、今後の本プロジェクト活動に大きく役立つ教材になると予想でき、今後の活動に期待したい。また人材育成プログラムは、オンライン開催によって、参加者人数は制限されたものの、全国から保育園・幼稚園教諭が参加し、人材育成としての成果はあったと考えられ、このことが全国の子どもたちに正確なからだの知識を伝えることに繋がっていくと考えることから成果と意義はあったと考えている。

③活動による貢献（意義）

おはなし会は、市民のみならず学生の教育としても貢献できていた。さらにからだ先生人材育成プログラムも全国に波及していることから、国民のヘルスリテラシーに貢献できていると考える。

④今後の課題

a. COVID-19 終息後に、中央区でのお話会をより普及させ、中央区民のヘルスリテラシー、健康づくりに貢献できるように具体的な活動を明示していく必要がある。学部生の部活動とともに「るかなび」の意見と協力も取り入れながら進めていく。

b. 人材育成プログラムに参加した保育士や幼稚園教諭が行った実演内容の報告を聴く機会を設けたい。

【満足度調査 0-10 数式尺度】

満足度：平均 9 点

【今年度の業績】

＜論文＞

a. 瀬戸山陽子、村松純子、大久保暢子、三宅美千代（2021）、保育士による 5-6 歳児向け「体のお話会」実施を通じて日常的に体のことが話題になるコミュニティの形成、聖路加看護学会誌（25 巻 1 号・2021 年 7 月予定）

b. 川浪美穂、大久保暢子（2021）：身体の知識教育に対する幼児の意識と行動に関する検討、聖路加国際大学紀要、7 巻、57-65.

＜学会発表＞

a. 川瀬浩子, 宮﨑つた子 , 佐野和香, 菱沼典子：年長児を対象とした 子ども達に「自分のからだ」を伝える活動の報告 1 -事業実施と振り返り会の結果内容から、日本小児保健協会第 67 回学術集会 2020.11.4-6、WEB 久留米

b. 宮﨑つた子 , 川瀬浩子, 佐野和香 1） , 菱沼典子：年長児を対象とした 子ども達に「自分のからだ」を伝える活動の報告 2－実施後の保護者アンケート結果から、日本小児保健協会第 67 回学術集会、2020.11.4-6、WEB 久留米

c. 川瀬浩子, 宮﨑つた子, 佐野和香, 菱沼典子：年長児を対象とした 子ども達に「自分のからだ」を伝える活動の報告 3 -事業実施園のその後の取り組み、日本小児保健協会第 67 回学術集会、2020.11.4-6、WEB 久留米

＜その他＞

a. 宮﨑つた子、川瀬浩子、長谷川明子、菱沼典子：子ども達に『自分のからだ』を伝える事業、令和 2 年度地域交流センター年報、Vol.23、3-24、三重県立看護大学地域交流センター年報、令和 2 年.

[*1] 聖路加国際大学 [*2] 三重県立看護大学 [*3] 東京医科大学 [*4] Baby in Me [*5] 聖路加国際大学名誉教授
[*6] 元幼稚園教諭 [*7] 聖路加国際大学大学院修了生 [*8] 保育士 [*9] フリー絵本作家
[*10] 看護師・保育士 [*11] 聖路加国際病院看護師 [*12] 看護師

【写真】

からだフシギダンス編　作成

動画の配信　《NPO 法人からだフシギブログからの引用掲載》http://npokarada.blogspot.com/

からだ先生のオンライン研修会の風景

■家で死ねるまちづくり　はじめの一歩会支援事業

事　　業　　主：山田雅子*1
事業共同メンバー：
篠原良子（会長：中央区環境保全ネットワーク顧問）
勝田高之（副会長：　一般社団法人セルフケア・ネットワーク理事）
麻原きよみ*1（会計：本学教授）
事　業　対　象：　中央区在住か、中央区にご縁がある方
利用人数（年間のべ人数）：122
開催（実施）回数（年間回数）：計 10 回
開催日　4/10、5/8（書面）、6/12、7/10、9/11、10/16、11/13、12/11、2/19、3/12

【事業目的】

中央区において「家で死ねるまちづくり」の実現を目指しているボランティア団体「はじめの一歩の会」を支援し、市民による地域包括ケアシステムの充実を目指す。

【事業内容】

今年度はコロナ禍にあり、定例会のほとんどをオンラインで開催した。メンバーは高齢者が多く、長年役員を担当されたメンバーが自宅で人生を終えるという経験を共有するなど、メンバーのリアルな暮らしの中での死について語り合う機会を得た。また、オンラインで参加できない会員や過去に本会主催の「互いに語り合う会」に参加した方へ、今年も往復はがきを出し、近況を分かち合った（写真）。中央区こどもとためす環境まつりは昨年に続き Web 開催となり、動画を出展し、今も視聴可能。
https://www.youtube.com/watch?v=sgsQgrCTMis&list=PLGK4prXjlUJ1n0EKjX-vYjl-2AMTPY2P3&index=34

【今年度の業績】

<学会発表>

a. 日本地域看護学会第 24 回学術集会, パネルディスカッション 3「地域のケル死別サポートの未来を考える」, 2021 年 9 月 12 日、篠原会長がパネラーとして参加.

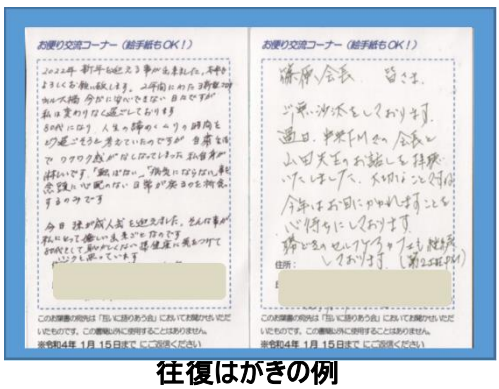
<その他-学内発表->

a. 2021 年　子どもとためす環境まつり　WEB 版
「語りつぐ江戸時代のエコ生活-江戸の医療」「ドキドキする心臓」
b. 中央エフエム（ラジオ）夢ぽけっとに出演（篠原、山田）

<記事掲載>

a. なし

【写真】



往復はがきの例

*1 聖路加国際大学

■健康情報の探し方・選び方・使い方を学ぼう！（いなかもち学習拠点プロジェクト）

事　業　主：髙橋恵子[*1]
事業共同メンバー：佐藤晋巨[*1] 松本直子[*1] 中村めぐみ[*1] 大垣尚子[*2]
事 業 対 象：一般市民（18 歳以上）
利用人数（年間のべ人数）：23 名
開催（実施）回数（年間回数）：計 2 回
開　催　日：2022 年 2 月 26 日,　3 月 12 日

【事業目的】

市民が自分の健康を主体的に創り守ることができるために、本やインターネットを用いて適切に健康情報を探し、理解し、評価し、活用する力（ヘルスリテラシー）の向上を目指す目的の事業である。

【事業内容】

今年度は、①オンライン講座と②出張講座を実施した。

① オンライン・ヘルスリテラシー講座

＜活動内容＞

2022 年 2 月 26 日（土）に市民対象のオンライン LIVE のヘルスリテラシー講座を開催した。第 1 部：10 時 30 分～12 時「いなかもちで健康情報を確認する」、第 2 部：13 時～14 時 30 分「健康情報を理解する」の 2 部構成の計 3 時間講座を実施した。講師は、本学教員（看護師）：髙橋恵子と本学図書館司書：佐藤晋巨・松本直子が担当した。その他、事務局メンバー2 名が参与した。

講座内容は、第 1 部で、ヘルスリテラシーとは何か、情報源の特徴を知ろう、健康情報を確認する 5 つのポイントについて紹介した。講師の説明に合わせて、参加者が事前に準備いただいた各自の本を用いて、入手した本の情報を、参加者と共に画面に本を映し出しながら、 5 つのポイントを確認していった。第 2 部では、健康情報を理解する 4 つのポイント、本とインターネットによる参考情報について紹介した。動画教材を視聴後には補足の説明を行い、気になる健康情報について参加者と情報共有をする時間を設けた。

＜活動成果および活動による貢献＞

・参加者概要：参加者は 6 名で、年齢は 20 代から 60 代の年代で（内訳：20 代 1 名、30 代 1 名、40 代 1 名、50 代 2 名、60 代 1 名）、性別は女性 5 名と男性 1 名であった。背景は、医療関係者（看護師）、養護教諭、図書館司書、学生であった。

・満足度：講座全体の満足度は、9.0 点（0-10 点満点）と高値であった。

・ヘルスリテラシー評価：講座終了後の「ヘルスリテラシー向上」に関するアンケート（全くそう思う 5 点～全くそう思わない 1 点：5 段階）では、①いろいろな情報源から集められるようになった、②自分の求める情報を選び出せるようになった、③情報を理解し、人に伝えることができるようになった、④情報がどの程度信頼できるかを判断できるようになった、の項目で、6 名全員が「全くそう思う 5～そう思う 4」に回答した。また、入手した健康情報を見極める確認ポイントについても、①いつの情報か、②何の目的か、③書いた人は誰か、④元ネタはあるか、⑤違う他の情報と比べて確認できるの 5 項目全ておいて、6 名全員が（全くそう思う 5～そう思う 4）と高値であった。

・講座の開催方法：については、開催の時間、講座全体の情報量、内容、開催時間帯、開催曜日、開催日数は、6 名全員が「適当である」と評価した。

・参加して最も良かったこと：「情報の探し方を学べたこと」「情報に向き合う際に意識する視点が明確になったこと」「ヘルスリテラシーの理解がより深まったこと」「健康情報について他者の考えを知ることができたこと」が挙がった。

・参加者の全体の感想：情報の確認ポイント「いなかもち」や理解ポイント「ぜひいも」を、今後に活かしたい、周囲にシェアしたいという参加者の声が聞かれた。また、健康情報を探す際に、自身の価値観と照らし合わせながら判断を行い、他者の価値観も尊重することが出来る姿勢を持ちたいといった感想も聞かれた。

② **出張講座**

2022 年 3 月 12 日（土）に、中央区で活動する「傾聴ボランティア：うさぎの会」のボランティア対象に、中央区女性センターブーケ 21 で髙橋恵子が講師として「健康情報を見極める力を磨こう」をテーマに講座開催した。17 名のボランティアが参加した。参加者からは、「これまで何も意識せずに、本を見ていたけれど、い・な・か・も・ちのポイントで本を見ていこうと思った」「とても役立つ情報を聞けて勉強になった」「家族にもさっそく教えようと思った」などの感想が挙がった。

以上より、今年度も参加者の参加満足度も高く、本講座の活動を通し、市民が適切に健康情報を探し、理解する力であるヘルスリテラシーの向上に貢献できたと考える。

＜今後の課題＞

・リクルート方法：テーマの工夫や対象を絞るなど、参加者を集める方法を検討していく必要がある。
・リモート開催準備：リモートトラブルは避けられない点はあるが、可能な範囲で事前準備をして臨む。
・実施内容の継続：研究としての実施が続くため、研究終了するまでは同じ内容で続けていく。
・育成プログラム：看護職、図書館司書、養護教諭など参加背景から、ヘルスリテラシー向上に関わる方の育成プログラムも検討していく。

【業績】

＜論文＞

a． 髙橋恵子, 佐藤晋巨, 松本直子,中村めぐみ,大垣尚子 (2022). 市民を対象にしたヘルスリテラシーの向上をめざすオンラインプログラムの構築, 聖路加国際大学紀要, 8.
b． 佐藤晋巨. (2021). 市民を対象とした「ヘルスリテラシー講座」.図書館雑誌, 115(7), 411-413.

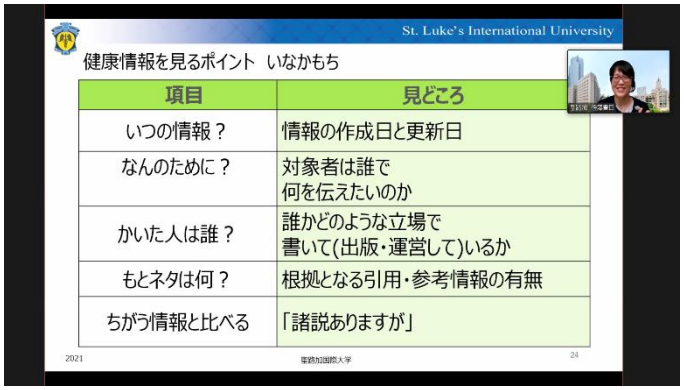
＜学会発表＞

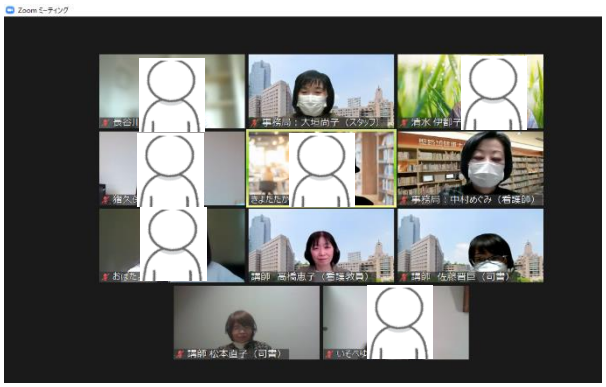
a． 髙橋恵子, 佐藤晋巨, 松本直子,中村めぐみ (2021).市民を対象にしたヘルスリテラシーの向上をめざすオンラインプログラムの構築, 第 26 回聖路加看護学会学術集会, 11 月オンライン開催.

＜活動＞

a． 8 月 12 日中央区高齢者通いの場事業（湊カフェ）.健康講座「健康は自分で創り守っていこう！」（講師：髙橋恵子・中村めぐみ）

＜オンライン・ヘルスリテラシーの開催状況＞





*1 聖路加国際大学　*2 ボランティア

■高齢者のための転倒予防教室

事　業　主：江藤祥恵[*1]
事業共同メンバー：亀井智子[*1]、川上千春[*1]、河田萌生[*1]、猪飼やす子[*1]、入江由香子[*2]
事 業 対 象：65 歳以上の高齢者とそのご家族
利用人数（年間のべ人数）：0 名
開催（実施）回数（年間回数）：計　0　回
開　催　日：なし

【事業目的】

高齢者の転倒、およびそれに伴うけがを予防するための知識、および運動方法を身につける

【事業内容】

転倒が起こる原因、自宅内の環境整備に関する集団指導として転倒の疫学や身体疾患、加齢性変化、内服薬、環境と転倒との関連性についての指導、食事と栄養、フットケアに関する指導として食事内容や栄養素、足の健康に関する指導、運動方法の指導などについて、外部講師もしくは教員、看護師資格を有する大学院生による講演を予定したが、今年度は Sars-Cov2 の感染流行のため、参加者を募集しなかった。

来年度の事業継続申請を行っている。Sars-Cov2 の感染拡大により高齢者の活動範囲の狭小化や ADL の低下、フレイルの増加が報告されており、転倒予防のための取り組みが求められている。来年度は、感染状況を鑑みながら開催することで、地域への貢献をしたいと考える。

【今年度の業績】

該当なし

[*1] 聖路加国際大学　[*2] 髙崎商科大学短期大学

■がん体験者のためのサポートプログラム

事　業　主：中村めぐみ
事業共同メンバー：紺井理和*1 橋本久美子*1 高橋美賀子*1 岩田多加子*1 大川恵*1
南千津子*1 坂井萌*1 萬屋里恵*1 岩間達子*2
事 業 対 象：がん体験者・その家族
利用人数（年間のべ人数）：13 名
開催（実施）回数（年間回数）：計 1 回
開　催　日：2021 年 12 月 18 日

【事業目的】

がん体験者およびその家族・友人の QOL の向上をめざし、自律性を尊重し、自己決定・セルフケアを支援するためのサポートプログラムを、看護職と他職種との協働のもと、計画・運営する。

1. がん体験者に対し、情緒的・教育的支援を行う
2. がん体験者を支える家族や友人に対し、適切な情報提供を行う
3. がん体験者・その家族のケアやサポートに携わる看護師の対応スキルの向上を図る

【事業内容】

本来は、がん体験者対象のサポートグループ「がんと共にゆったり生きる」を年 3 回、サポートグループ修了者の交流の場である「若葉の会」「クリスマスの集い」、家族対象の講座「身近な人ががんになった方へ」を年 1 回計画していたが、今年度も新型コロナウイルス感染拡大防止のため、対面および集いの開催は見合わせた。

サポートグループ修了者の集いに関しては、若葉の会の時期（6 月）にメンバー全員の寄せ書きを郵送した。クリスマスの集い（12 月）は初の試みとしてウェブ開催とした。日時は 12 月 18 日（土）14:00～15:15 で、案内は全員に発送したが、予想どおりウェブでの申込者は少なかった。内容は、「体力を維持する運動」「太らない痩せないための適切な食生活」「コロナ禍で心の健康を守る」についてのミニレクチャー、ゆったり生きるためのクイズ、参加者全員からの近況報告を分かち合った。

参加者からは好評を得ることができた。

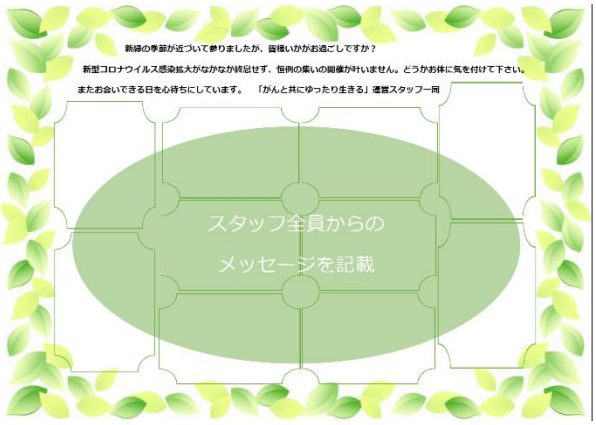
【満足度調査 0-10 数式尺度】

満足度：評価は行わなかった

【今年度の業績】

なし

【写真】



若葉の会：スタッフの寄せ書きを送付

クリスマスの集い：ウェブ開催

*1 聖路加国際病院看護師　*2 聖路加国際病院管理栄養士